現代結婚考

２１世紀のライフスタイルを考える特別委員会委員長　梶原光恵

昨今の男は、女性よりも10年遅れているそうである。故に30代半ばの女性には20代半ばの男がちょうど良く、40くらいなら30前後の男がふさわしいと言うことになる。

これは今年の初め毎日新聞に掲載されたシリーズの一部であるが、確かに35歳以上の男の殆どは、旧来の男の“沽券”にこだわりを持っているが、若い男性ほどそのこだわりが薄いように思う。例外は常におられるとして、女性の方が役職が上でも、給料が多くてもこだわらずそれをその女性の能力として認めるということは他人ならいざ知らず、自分の女房にする場合今までは嫌がる男性が多かったのは事実である。

才能も能力もある女性に、気楽に結婚を考えさせる結果となったのは喜ばしい。ただし年が下でも能力において同格の場合はうまく行くらしいが、男が下の場合自分以下の女性に走ることもあるそうだ。

また女性が社会進出した結果、旧来の男性同様心のない性を求めるという現象があるという。ストレスの発散も男性なみということなのでしょう。しかし傷つけ合うことのない性関係だけで、結婚したくない子供も欲しくないと言うのは平安な生活と呼べるのだろうか。そこにあるのは“自分の部屋”を守るという価値観であるらしい。

子育てが塾に通わせることだけでは苦痛でしかない。『教育』で取り上げた同じことが若い人たちの結婚観にも影響している。ダイオキシンで生殖能力が衰え男女とも淡泊になってしまったのかも知れない。自分自身が幸せな幼少期を送っていれば、否、不幸せであればよけい自然に家庭を求める人が多かったのに今結婚に価値を見出せないということは、もう一度社会全体で結婚の形態を考える時なのではないだろうか。

私の理想で言えば、夫の両親・私の両親・私たちの３世帯住宅に住み、それぞれ仕事を持ち食事だけが一緒であとは互いに干渉しない、そして子供は幼児の時期だけベビーシッターをつけ、週に一度家政婦さんに掃除と洗濯を頼む。食事は交替でみんなで作る。誰かが病気の時は、みんなで支え合える。

同世代同志では共に年を取り、最後の人がババを引く。やはり各世代が同居するのは理に適っていると痛感する。そうは思いませんか。ただし従来の嫁・姑ではない新しい価値観が必要となる。お互い対等に尊重しあいかつ一つの共同体意識で結ばれ、一緒に支え合う関係が世代間だけでなく夫婦間にもなくてはならない。

20年くらい前に見た中国の庶民は、共産主義の結果女性も全員働き、その為に朝食は家族全員屋台で取っていた。日本でも駅近くのカフェテリアで通勤・通学前の家族全員が朝食をとる姿が見られてもおかしくない。小学生以下の子供は下校後、町の児童館で遊び迎えに来た父親か母親と夕方商店街でお総菜を買って帰る、掃除や洗濯も親子の当番制で土・日は家族団欒なんていうのも悪くはない。子供なんて何か手に職をつけさせれば将来は何とかなる。そう思えば結婚も気楽に入っていけると思うのだが、コウアラネバナラナイ、コウアルベキダ、と考えず社会全体がゆったり構えることが重要な気がする。同じ事をするにも片身の狭い思いをしながらするのと、堂々と社会に支えられながら暮らすのでは雲泥の違いがあるのだ。

夫婦別姓もおおいに結構、一人っ子も増えている、別姓だから家族ではないなどとんでもない。うちの父も末っ子で母方の姓（梶原）を継いだが、家族愛は親兄弟並々ならぬものがあった。本来祖父は梶原の養子だったが、長男だった為梶原を名乗れなかった。故に祖父の田邊姓はそのまた長男が継ぎ、末っ子の父が梶原を継いだという訳だ。昔は家制度がうるさく長男は大きな意味を持っていたようだ。

私は実際に別姓の家族を見て仲の良いのを知っているから、夫婦別姓が家族崩壊に繋がると主張する輩がウソっぽく見えて仕方が無い。ただ、家長を中心としたピラミッド型の家制度が崩壊するだけである。

ＫＹＯＴＯで決めよう。ストップ！地球温暖化

平成維新東京女性担当役員　笹本弘子

２１世紀に向けた、地球温暖化防止の具体策づくりを目指す法的拘束力を持つ国際会議が、12月１日～11日まで京都で行われました。

二酸化炭素などの温室効果ガスの排出削減と、達成期限を決めるＣＯＰ３は、人類の未来を左右する歴史的意義をもつ会議である、ということで私も関心を持っていました。

私たち一般の人は参加する事は出来ないのですが